

# 東ブータンの共有林における森林資源利用および管理: タシガン県カリン地区を対象として

土谷 斗彰

キーワード: 東ブータン、共有林、森林資源利用、木材・非木材資源

## 1. 背景と目的

ブータン王国では、1969年の森林国有化以降、森林管理への地域コミュニティの参加が進められてきた。その一環として新たに政府主導で導入された共有林政策の下で1997年にブータンで初めての共有林が設立され、現在では500ヶ所以上で共有林が村人たちの手で管理されている。自給的森林資源確保の場としての共有林に加え、収入源増加による貧困削減効果といった、幅広い役割が期待されている。一方で、この共有林制度は比較的新しいためにその実態が明らかになっておらず、現場レベルからの効果の検証が必要とされている。

本論文では、タシガン県カリン地区の二つの村(L村およびM村)を対象とし、それぞれ村の共有林が農村社会に与えている影響を、自給的な森林資源利用および現金収入源としての森林資源利用という観点から明らかにする。

## 2. 東ブータンの二つの村における生業と森林資源利用

まず、集落レベルの統計情報が不足していたため、農村の生業について各村での聞き取りを行った。各村の現金収入源の6割以上は農作物販売(ジャガイモ)に依存しており、8割上の世帯が家畜として牛を飼っている。森林資源は個々の世帯の現金収入源にはなっていないが、生業の中心である農業や酪農を支える役割を果たしている。例えば、木材の中では、建材が牛舎の建設に使われており、薪は、牛の飼料を調理するのに重要である。非木材資源については、冬場には樹木(コナラ属)の落ち葉およびシダ類の敷料利用および堆肥利用がみられた。

## 3. 共有林制度の下での森林資源利用の実態

次に、実際に森林資源がどのような場所から採取されているかを調べた。木材資源については、共有林からの伐採が各村において大多数であった。しかし、非木材資源については、共有林以外の森林の中でソクシン(Sokshing)と呼ばれる落葉採集林や国有林へのアクセスも一般的であった。ソクシンとは、昔から村で習慣的に利用されていた落葉樹林であり、現在は国有林ではあるが、人々は「ソクシンは自分たちの森だ」という所有の意識を持っている。特に刈敷用の落葉についてはL村の8割近くの村人が共有林ではなくソクシンから採集していることがわかった。

## 4. 現金収入源としての共有林および森林資源利用

各村において、共有林からの森林資源の販売によってコミュニティ全体としては現金収入があるものの、個々の世帯の収入には直接的な貢献はみられなかった。国道へのアクセスがよいM村では外部者との交流が頻繁にあるために、販路が多様であった。また、地元住民が利用していない森林資源でも、外部者へ原料となる植物を直接販売するという形態での販売も可能となっており、森林資源の販売による収入増加には外的要因が深く関わっていることがわかった。

## 5. 結論

ブータンにおける共有林は、木材資源へのアクセス向上という観点から農村社会の資源利用に多大な貢献をしている。一方で、非木材資源については、必ずしも共有林が資源提供の場となっているわけではないことがわかった。また、政府が掲げる収入増加・貧困対策といった効果は、現在の共有林の仕組み上は達成が困難な目標だと考えられる。また、伝統的に利用されている‘かつての’ソクシンを政府が今後どのように取り扱うかが、村人の生活および今後の共有林のあり方にも大きく関わるのではないかと考えられる。